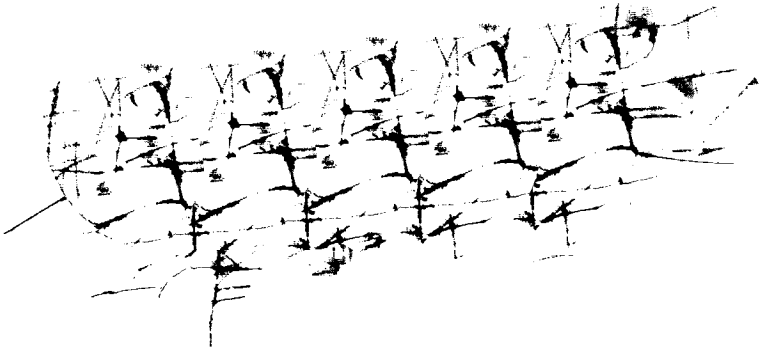
花祭

安岡章太郎



花　祭

安岡章太郎

花　　祭

●著者　安岡章太郎　●発行者　佐藤亮一
●印刷所　塚田印刷株式会社　●製本　神田加藤製本所　●発行所　株式会社新潮社
郵便番号162　東京都新宿区矢来町71番地
電話 東京 03 (260) 1111　振替 東京 808 番
昭和37年 9 月26日発行　昭和45年12月 5 日 9 刷
定価　510円

© 1962 Shôtarô Yasuoka Printed in Japan
落丁本はお取替えいたします。

花

祭

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

真上に明るい温い空があった。蒸れた綿のにおいと枯草のにおい、それに土の乾くにおいが、まわりから僕の体を包んでいる。耳もとでアブのように大きな蠅が鈍いうなり声を上げながら、ときどき耳タブにとまったりするが、追い払う気にもなれない。干したふとんの上に寝ころんでいるのは実際、好い心持だ。眼をあけると、尖った棟の本堂の屋根瓦が葉の落ちた梢ごしに白く光っている。

和尚さんは僕に、部屋の掃除とふとん干しを言いつけたまま、どこかへ出掛けて行った。もうあれからどれぐらい過ったろう？　こうやっていると、時間はまるでケムリのように眼の前でゆらめきながら消えて行くので、さっぱり見当がつかない。ここは、本堂からもそ

の横に鍵なりにのびた庫裏からも、一段さがった窪地になっているし、南側の生け垣の向うは崖になって下の通りまで降りているから、どこからも見透される心配はないのだ。いや、もはや僕にとって和尚さんは何でもない。こうやっているところを見つけられたからといって、別段ちっとも怖ろしがることはない。むしろ僕にとって気懸りなのは、こうした静けさ——誰からも見られていないということなのだ。

いつまでも、こうやっていられたらな、僕は立ち木や植込みの茂みに囲まれた空を見上げ、カラカラに乾いたシーツの上に両腕をのばしながら言ってみる。しかし、じつのところ、それは僕が怖れていることでもある。この温められた空気は、綿の間にしみこんでふとんをふくらませ、雑草の管の中にある青臭い汁気をたぎらせるのと同じ作用を、僕の体の内部にもおよぼしていることだろう。知らぬ間に自分が何か変った姿になりつつある、これは実際へんな気持だ。耳タブの上にとまっていた蠅が頬の横へ移動しはじめた。蠅の足には吸盤のようなものでもついているのだろうか、うごいて行ったあとに粘り気のある痛痒さがのこる。僕は死んだふりをして眼をつむったまま、黒い毛に包まれた脚が用心ぶかく頬の上を這っているさまを想像する。蠅としては、地面に落ちた桃や熟れた西瓜とくらべて歩き心地は

どうだろう。僕は小鼻のわきから上唇へかけて、密生したうぶ毛がだんだん黒く色づいてきていることを憶い浮べた。すると突然そこから先を考えるのがイヤになり、僕は蠅をはらいのけた。

なぜだろう、僕には自分のやったことがわからない。僕は反射的に寝がえりをうち、横眼でそっとあたりをうかがう。眼球のはしに窪地の斜面の一個所がうつり、僕はふたたびドキリとする。踏みくずされたのか、ひとりでに崩れ落ちたのか、雑草におおわれた地面が、そこだけ赤いハラワタのような土の断面をさらしている。土の中にもぐりこんでいた草の茎は白くツヤツヤ光っており、さきは細いヒゲのような根っこになって、せいいっぱい泥を抱えこんでいる。……暗い重苦しいものに胸を抑えつけられて、心臓が不意に動悸を打ちはじめる。まるで頭のうえでイナビカリでもしたときのように、僕は眼をかたくつむり、歯をくいしばる。と、どうしたことか暗い眼蓋のなかに白い女の子の脚や股倉が浮び上り、それが見るみる強く、灼きつくようにハッキリと迫ってきて、僕はその中にすっぽり包まれてしまう。そして胸の動悸もまた心配や怖ろしさのためではなく、好奇心のよろこびに高鳴りはじめるのだ。

あのとき女の子は、「こわい」と言った。股をひろげて小便をするような恰好で地べたにしゃがみこんだままでだ。僕は、そんな彼女を息をつめながら下から熱心に覗きこんでいた。……「こわいよお」と、女の子はほとんど泣き出しそうな声でさけんだ。何が怕いもんか、僕はその泣き声に一瞬ひるみかけながら、そう思った。手ににぎった鉄道草の茎が汗をかいてしおれかかっている。青白いその茎は女の子の内腿と同じくらいに柔らかく、さっきまでは冷いしめり気をおびてツヤツヤ光っていたのだ。女の子の顔は真赤になった。僕は胸の中が熱くなる。……だいじょうぶだよ心配しなくても、だいじょうぶだったら。僕はせいいっぱい愛想のいい微笑をととのえながら、女の子の方へにじりよる。

「こわいよお」

女の子はまたさけんだ。黒い瞳の中にこれまでにない恐怖の影が反映した。僕はイラ立たしい気持で振りかえった。すると、女の子の弟をのせた乳母車がゆっくり、まるで夢でもみているようにノロノロと背後の斜面を、いまにも転げ落ちそうになっているのだ。

そのときの緊張、その恐怖、そのオカシサが何であったのか僕にはわからない。わかっているのは僕が一瞬のところで崖下に転落しそうになっている乳母車をつかまえたことと、次

に女の子の脅えた顔色をもう一度ながめなおしてみたい気持になったことだ。あのとき、たしかに僕はこれまでにない快いもの、愉しいものを感じた。しかし、それを憶い出そうとおもっても、いまはそれができない。

はじめて僕がこの寺へつれてこられたのは二年ばかり前の、冬の寒いころだ。傾斜の急な暗い石段を上ってくる間じゅう、母は肥った体に息をはずませながら、文句のいいどおしだった。

「お前がわたしに心配をかけるたびに、わたしの体はそれだけ肥る」

これは彼女の口癖なのだ。母はすくなくとも親戚中では一番気楽なくらしをしていることになっている。口やかましくない父と一人っ子の僕、家族はたったそれだけだから、家にいて面倒なことは一つもない。父が連隊からもらってくる月給は多すぎも少すぎもしないし、それで毎月のくらしを立てて行くことは子供にだって出来るだろう。母は月給日の前ごろにお金がなくなると、ロバがひいてくる「玄米パン」の馬車を呼びとめてアンパンを買い、そ

れを御飯の代りにした。母にわたされた五銭玉をにぎりしめて、僕はどんなに張り切って馬車に駈けつけたことだろう。母と二人で畳の上に寝そべったまま、紙袋の中で湯気を立てているパンを手づかみにして食べるのは、どんな御馳走よりもたのしかった。他の家では食事だのオヤツだの時間をきめて子供にあたえるところもあるらしい。そんな規律正しさは無意味なことだと母は僕に教えたし、僕もそれに賛成だった。たしかに家の中でわざわざ規則をつくって自分からそれに縛られるのは馬鹿なことだ。ただ、いまになって考えると、こうした気ままな母のやり口から一つだけ悪い酬いがきた。僕がナマケモノになったことだ。そして、それが母にとって唯一の心配事なのだ。学校からハトロン紙の封筒に入った呼び出し状がくると、そのたびに母は怒りと心配で青くなりながら、分厚い胸に手をやって、苦しげに吐き出す息といっしょに「また、こんなに肥って——」と言う。おかげで僕は、いまでは母の白い皮下脂肪に圧迫された心臓が、鶏よりも、鳩よりも、雀よりも、小さく縮まって行くさまを、まるで自分自身の心臓のように感じることができる。……しかし、ものごころついてから僕の眼にうつる母の体軀は、いつもきわめて巨大なものに見えたから、僕が心配をかける回数と母親の体積との間に、一体どのような関係があるのか判断しにくいところがあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

る。

「ああ、くるしい……。ああ、たまんない……。あーあ、ほんとに耐らない。これもみんな、おまえのおかげだ」

母は石段を一段あがるたびに仰向いて言った。あたりは真暗で、この石段はどこまで行ったら終りになるのかわからない。おまけに、ところどころ石が欠け落ちており、そのたびに膨らんだゴム毬のような母の体は僕の肩や背中によろけかかって、白粉のにおいと、防虫剤のしみこんだ毛織物のにおいとが、暗闇の空気を掻きまわすように拡がった。――「このにおいとも今夜で当分、お別れだ」と僕は心ひそかにツブやいた。僕はきょう、これから、このお寺、永正寺でくらすことになる。東京で一流とまでは行かなくとも、二流の中には充分かぞえられるD中学の入学試験に合格したのは、僕としては大手柄だったし、母の体もいくらかは痩せられたはずだが、その状態はせいぜい半歳ぐらいしかもたなかった。ブルドッグという仇名の担任の教師と、頭は禿げているのに顔は美少年そのままの教頭から、たびたび家庭のシツケと学業に関する注意が発せられ、三学期に入ると間もなく、「このままでは原級もしくは転校の処置をとらなければならなくなるから」というので、国漢の保成倫堂先生の

家へ〝入院〟させられることになったからだ——。僕にとって、この処置は二重の意味でありがたかった。一つは〝入院〟することは学校の中で、ただの劣等生とはちがった箔をつけられることになるからだ。頬のこけた赤ら顔のZ、もみあげを長く耳の下までのばしているK、平らなトリトメのない面だちなのに眼つきだけが鋭いI、彼等はみんな上級生だが、それぞれ札つきの入院患者として、われわれから怖れられている。彼等の顔には、例えば鉄格子の影がさしたような陰鬱な精悍さと近寄り難さとがあり、僕は自分もまたそのような顔つきになるのかと思うと、言いようのないよろこびと緊張とを感じたのだ。それにあずけられる先の保成倫堂先生の家が曹洞宗の寺で先生はそこの住職だということも、何か一風変った期待をいだかせる。……しかし、何よりありがたかったのは、同じ個所を練習しているヴァイオリンの執拗さでまつわりついてくる母の嘆声から逃げ出せることだった。「ああ、またこんなに肥って」お母さんは、それをどこまで本気で言っているのか？　僕はときどき母が「姉さん」ぶっているように感じる。僕だって知らずしらずそれに調子を合せていやしないか？　そう思うと僕は後足で得体のしれないものをグニャリと踏みつけたような気持になり、わけのわからぬ狼狽とイラ立たしさをおぼえてつぶやく。「お母さんなら、もっとお母さ

んらしくしてるがいいや」

僕の想像したお寺というのは、頭を剃り上げた何人もの小坊主が、朝の暗いうちからお経を読んだり、庭の落葉を掃いたり、隊伍を組んでひろい廊下や縁側を拭いたり、といったわれわれの日常とはちがった集団生活の行われているところだ。それは厳しいかわり、お母さんの調子はずれのヴァイオリンみたいに気まぐれな小言をしつっこく聞かされることもないだろう……。しかし、ここには寝とまりしている僕と同じ年頃の小坊主はいなかった。ひろい縁側も廊下もなかった。お寺といえばすぐ頭に浮ぶ鐘突き堂もなかった。鐘は本堂のすみに火の見ヤグラの半鐘ほどのが吊るしてあり、その横の骨壺をあずかる部屋に黒い立型のピアノがあった。日曜日になると、この半鐘のような鐘が鳴らされ、集った近所の子供たちが倫堂先生のピアノを伴奏に、

天にはひかり地には花
たった一人の王子さま

という歌を合唱する。それはキリスト教の讃美歌に似ているが、おシャカ様の誕生を祝う歌なのだ。このお寺はキリスト教の日曜学校をマネしているにちがいなかった。どうしてそんなことをするのか、僕にはその理由はわからない。しかし古びた本堂からお経の代りに讃美歌めいた唱歌が聞えてくるのは、このお寺の性格をあらわしていると言ってもよかった。先生の奥さんは鼻の長い、背のすらっとした人で、女子大出身だそうだが、この人がやはりお寺さんの出だとは不思議な気がする。余計なことだが、僕はお坊さんの結婚式とはどんなものか、考えると何だか奇妙になるのだ。先生と奥さんの間に、四つになる女の子と、赤ん坊の男がいる。それにいやに顔の幅のひろい猫背の女中、これが家族の全員だ。

要するに、お寺には僕の好奇心を満足させるようなものは何もなかった。ただ普通の家にくらべて建物がずっと大きく、古めかしく、暗くて、陰気だというだけのことだ。最初の夜、つきそった母がかえったあと、先生は納戸の奥のかんがえられないほど薄暗い部屋に僕を案内した。なかへ入ると畳がふわりと、まるで古いふとんを踏みつけたように凹み、びっくりして思わず次の足をシッカリ踏み出すと、ぽこっと鈍い音がして畳のつなぎ目が一寸ほど落ちた。床のどこかが腐って折れたにちがいなかった。反射的に僕は先生の顔を見上げた。そ

のときの和尚さんの顔をなぜか僕は忘れることができない。先生は何も言わず、口の中で小さく舌をうごかすと、痩せた頬に微笑のようなものをうかべた。すると僕は、この人は黄疸をわずらったのだということを憶い出した。一学期の中頃からしばらく、国語と漢文の授業が休みになって、われわれは先生の病気に感謝した。そのとき聞いた病名を、いま僕はこの古い部屋で突然想いうかべたのだ。シジミ、泥のなかで住んでいる貝が黄色い汗を止めてくれる病気、それを僕らは他人の無関心さで噂し合った。しかしいま同じ無関心さが僕を檻のように閉じこめてしまった。

「じゃ、今夜はゆっくりおやすみ」

「おやすみなさい」

和尚さんが部屋を出て行くときの言葉を芝居じみていると思いながら、僕は追いつめられた動物が穴の中へ駈けこむような気持で、ふとんにもぐりこんだ。その冷いこと、こんなにふとんが冷くなるものとは初めて知った。まるで水に漬ったようだ。——お母さんはもういない。いまごろは家で着物をきかえているだろうか。しかし玄関で別れた母の肥った丸っこい背中が小さく消えて行ったことは忘れることにした。闇の中で遠くから、低い男の声が調

子をつけてうたうように聞えてくる。誰かがお経を上げているんだ、僕は一瞬そう思い、夜気に包まれた寺が途方もなく拡がって行く気がした。けれども、よく耳をすますと、それは谷一つへだてた向うの岡のA駅のラウド・スピーカーが列車の発着をつげる声だった。

朝は田舎の家のように、外の井戸端で顔を洗う。空気が冷くて寒いのは何でもないが、水がやたらにハネ返るのは閉口だ。ウガイの水を吐き出すと、井戸のわきの柿の木の黒い根本に歯磨の混った白い唾がべったりとひっかかって、何とも言えず汚らしい。

「歯をよくみがきましたか」

と奥さんが笑いながら声をかけた。前の晩、母が「この子は、まだ一人では満足に歯もみがけませんの」と言ったことを憶えていたからだろう。けれども、あれは母が冗談のつもりで話したことだ。無論、僕は歯を他人にみがいてもらったことは一度もない。濡れたタオルをぶら下げたまま、お膳のまえで支度している奥さんに、どこへ干せばいいのかを訊こうとすると、奥さんは、

「ほかのことはかまいませんけれど、朝のお食事のまえのお祈りだけはしてきてちょうだい」と言った。「簡単に手を合せるだけでいいでしょう。……ね、おとうさん」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com